

大槌町中央公民館吉里吉里分館の設計 復興まちづくりにおける公共建築計画の考察

喜多 裕¹・木内 俊克²・二井 昭佳³・山田 裕貴⁴

¹非会員 喜多裕事務所 (〒113-0033 東京都文京区本郷2-18-13-2F, E-mail:yutakakita@gmail.com)

²非会員 修士(工) 木内建築計画事務所 (〒113-0033 東京都文京区本郷3-13-5-2F, E-mail:contact@toshikatsukiuchi.com)

³正会員 国土館大学理工学部 准教授 (〒154-8514 東京都世田谷区世田谷4-28-1, E-mail: nii@kokushikan.ac.jp)

⁴非会員 博士(工学) 株式会社Tetor(テトー) (〒162-0825 東京都新宿神楽坂4-2, E-mail: yamada@tetor.co.jp)

本稿は、東日本大震災で被災した岩手県大槌町の中央公民館吉里吉里分館の設計内容を報告するものである。大槌町吉里吉里地区の復興計画段階における公民館の検討経緯と、復興計画内容を引き継ぎ設計の要点としていった点を詳述する。考察として、複数の事業及び住民との協議が同時並行する計画での連携で得られた、同公民館の建築計画上の特質について記述した。

キーワード:大槌町, 吉里吉里地区, 公民館, 東日本大震災, 復興計画

1. 公民館計画の背景

大槌町は東北地方岩手県の太平洋沿岸部の町で人口は約1.2万人、リアス式海岸域の大槌港湾に近接した中心部を持つ。町全体は東西に広がり北上山地にかかる山間部もかかえている。その中で吉里吉里地区は、大槌湾の北にある船越湾に面する人口2千人強の地区である。2011(平成23)年の東日本大震災で被災し、復興の過程にある。

以下に大槌町が進めている復興計画の骨子を略述する。他の被災地同様、復興計画は防災を軸とした地域の在り方の問い直しである。

町共通で、第一には防災教育・防災体制の強化に取り組んでいる。次いで、海岸保全施設整備・避難路避難施設の整備、第三に移転・かさ上げ・土地利用規制の計画を進めている。¹⁾ 教育・文化や地域交流が人命を守る役割を持つということが、ハード整備の在り方と並んで議論されたことは、復興計画の過程の大きな意義であり、今回の災害を機にした見逃すことのできない社会的な変化である。

復興計画の内容は多くの被災自治体にとって未体験の事業スケールであり、大槌町では被災後の年間予算は震災前の約10倍となった。多数の事業が同時進行する状況が続いており、各事業や計画間での調整は断続的に必要



図-1 2018(平成30)年4月に実施された落成式にて、吉里吉里公民館を公園越しに望む。

である。大槌町では主要地区ごとに学識を担当させつつ地区間での連携を図り、住民を交えた協議会を行うかたちで事業の整理・復興計画の検討が進められた。²⁾

本稿は吉里吉里地区の復興計画の中で大槌町中央公民館吉里吉里分館（以降、吉里吉里公民館と略称する）(図-1)の検討が進められた経緯とその内容を報告する。復興計画や並行する事業との連携、地域との協議に着目し、他の災害における復興計画、また各地のまちづくりと関連した建築計画においても参考となるよう考察を加えるものである。

2. 復興協議会による公民館概要の検討

(1) 吉里吉里地区復興計画の概要

吉里吉里地区の復興まちづくり計画の内容とプロセスは同地区の学識コーディネーターである二井による論文³⁾にまとめられている。ここでは公民館の検討以前の、2012(平成24年)6月までにできていた地区の計画概要を表-1にまとめる。図-2と共に参照されたい。

表-1 吉里吉里地区復興まちづくり計画概要

基本コンセプト	
<ul style="list-style-type: none"> ・砂浜の広がる海・低地から斜面地へなだらかに広がる集落という魅力的な地形を生かした美しい地域の再生 ・従来のまちの骨格を大きく変えずにコミュニティ維持と防災強化を兼ねた再編 	
海浜部について	<ul style="list-style-type: none"> ・防潮堤を既存高さ6.3mから12.8mへ ・砂浜の保全・海辺の賑わいの必要性については住民からも要望があり、防潮堤の位置を海岸線からセットバックする
造成・街区について	<ul style="list-style-type: none"> ・防潮堤背後の盛り土を上げる居住エリアは従来のまちの中心としての位置・役割を保ちつつ山側へ集約 ・防潮堤・盛り土エリアに合わせて国道の線形を変更 ・まちから海への視認性・アクセス性に配慮して国道・街区のレベルを設定 ・区画整理事業にて中心部の街区を形成 ・防災集団移転促進事業にて高台移転地の形成
街路・公共スペースについて	<ul style="list-style-type: none"> ・まちと海をつなぐ道「海の軸」を区画整理街区の中心に設定 ・海の軸と交差し、既存の道に接続して高台避難場所へつながる道「山の軸」を複数設定 ・日常の生活動線と避難路の一致を意図した街路計画 ・海の軸に沿って要所に公園を設置 ・中心部の公園である「まちの広場」、地区内の主要施設はこの付近に集約する方針とし、賑わいを生む店舗などの立地も奨励



図-2 吉里吉里地区復興計画イメージ図（筆者加筆）

計画概要の考え方は、災害前の地域の構造を極力継承すること、災害を機に改めて必要性が強まった日常時・非常時双方の地域連携に資するまちへ変革すること、の2点に総括できる。日常時と非常時を視野に入れた街区計画については、中井の論文に記述されているとおり、大槌町の他地区でも計画された。⁴⁾ 災害前の地域構造の継承が不可能な地区ではまちをつくる拠り所を探すことから始めなければいけないが、吉里吉里地区においては、甚大な被害の中にあつて海や砂浜、一部被災を免れた山裾の集落を地域構造の起点とすることができ、そこに地域の自然条件や日常生活に沿って更新された防災の考え方と基盤整備が住民との議論の中で計画された。

(2) 公民館計画の始まり

a) 始まりの経緯と仕様の概要

上記の復興まちづくり計画が進む中、2012(平成24)年6月頃に町内全体の被災施設対応方針の概要がまとまった。吉里吉里公民館は国補助金を一部財源とする災害復旧事業として位置づけられた。前提条件として、避難所としての役割は負わない。敷地となる区画整理区域内は、災害危険区域外ではあるが、東日本大震災における浸水実績があるため、より高台にある保育園・小学校・中学校などが地区の避難所として位置づけられている。⁵⁾

b) 旧吉里吉里公民館について

旧公民館はRC造一部鉄骨造の2階建て、延床面積約430㎡の規模であった。旧立地はまちの中心部から離れた災害危険区域内にあり、津波で全壊の被害を受け解体された。平面図を図-3に示す。復旧事業のため、室構成・規模は新公民館でもこれを踏襲した。東京建設コンサルタントの調査によれば、1日あたり約1回以上の有料施設利用があり、利用頻度は高かったといえる。地区住民の結婚式や同地区に赴任した教員の歓送迎会を住民の手料理で彩るなど、心を込めた大事な行事にも利用され、地域交流へ資するところは大きかったと考えられる。

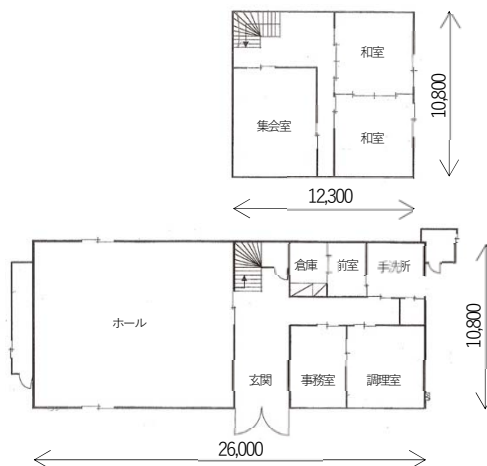


図-3 旧公民館間取り図（筆者加筆）

(3) 公民館の配置およびその在り方についての検討経緯

2013(平成25)年の大槌デザイン会議の地区別WGにて「まちの広場」と称された公園の配置検討が進み、区画整理事業エリア内で、周りに施設を集約できる可能性、国道との距離感などを鑑みて、公園は現在の中心に近い位置とされた。それに伴い、公園と隣接した土地に公民館の敷地があてられた。公園付近に集約される、コミュニティ形成の上で重要となる主要施設として公民館が位置付けられたわけである。

二井昭佳、山田裕貴((株)EAU所属時(現・株式会社Tetor))が住民との協議の中で基本デザインをまとめた公園の特徴は、大きな芝生のマウンドと、敷地四方内の三方を接道する開放的なつくりである。残る一方は公民館に面しており、建物との一体的な利用が企図されている。三方の道路を公園の延長として利用することも視野に入れており、建物・公園・道路を合わせた大きなスペースとしての有効な活用が期待された(図-4)。実際に公民館の落成式にてこの狙いは実現され、にぎわいの光景はすばらしいものだった(図-1)。後述する吉里吉里地区の地域力あつてのものである。

2014(平成26)年9月、地域復興協議会にて公民館の概要について地区住民との議論が行われた。議論においてまとまった全体的な考え方としては、1) 子供が気軽に滞在できて多世代で交流できる場所、2) 震災について語り伝える場所、3) 多数の団体で柔軟に活用できる場所である。また具体的な要望として、いつでもだれでも自由に使えるフリースペースの設置が挙げられた。今後の地域交流強化の必要性、館長が常駐することなどから、予約不要なスペース利用の可能性が議論された。ここまでの公民館関連の計画にかかる流れを表-2にまとめる。

表-2 公民館に関連した空間計画にかかる流れ

年	取り組みなど
2011(平成23)年	12月 大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画 策定
2012(平成24)年	4月 地区別WG開始 6月 町内の被災施設対応方針の概要がまとまる
2013(平成25)年	3月 大槌デザイン会議 開始 9月 第2回復興計画WSにて公民館配置についての合意形成
2014(平成26)年	3月 大槌デザイン会議 終了 デザインノート完成(公民館位置づけ・配置の明記) 7月 地域復興協議会 開始 9月 第2回地域復興協議会にて公民館の基本コンセプトがまとまる

※会議等の枠組みは中井による論文⁶⁾に詳述



図-4 第3回地域復興協議会資料抜粋 公園と公民館の配置

(4) 協議会の様子

公民館のより具体的な議論をサポートするため、建築専門として筆者らもこの段階から二井のコーディネートによる吉里吉里地区の地域復興協議会に参加した。以下、その実録と所感をまとめる。

協議会の記録の前に、地域の様子を伺えた出来事を紹介したい。協議会日程と、地域の伝統行事「黒森神楽」が同日であり、協議会の前に二井や筆者も地区住民と同席して神楽を鑑賞する機会に恵まれた。黒森神楽とは、大槌町の北方約40kmの沿岸の街、宮古市にある黒森神社をゆかりとする神楽巡業である。古くから「神楽宿」を務める名士が自らの邸宅に神楽を受け入れ、地域住民を招く伝統の行事だ。終始格式ばった演目のみならず、子供も腹を抱えて笑い合う時間があり、地域文化を抛り所にした生きた共同性を育む場であった。今後は公民館としても神楽の受け入れを予定しているとのことである。

協議会には20名ほどが参加し、それぞれが婦人会、敬老会などの地区内の団体の合意形成の代表者として参加している意識もこの地区の特徴であった。震災後には、交流を目的としたグループ組織も地区内に多数つくられ、吉里吉里地区だけでグループ活動の補助金事業に当選するなど活発で多様な地域活動が展開された。

建築専門の立場からは、まず大枠となる公民館のプラン構成の選択肢を提示した。選択肢を問う際には、活動優先順位の価値観を問う内容とするよう注意を払った。

図-5に示す2案を一見したところ、誰が言い出すでもなく同意の輪が広がり、B案に決まった。立ち寄りやすさ、外部空間と建物の一体利用、といった要望の内実として、どんな場所でどんな規模活動が行われるのかについて、ビジョンを共有できた瞬間であったと思われる。

協議会参加者は、案を前向きに受け取ってくれ、すぐ手に取って活用の想像を始めていた。各団体活動の実効性を背景にした決断力がある。住民の語り合いの親密さや明るさ、震災を次世代に伝承する意識、その表情に触れたことも計画を進めていく上での大きな情報であった。

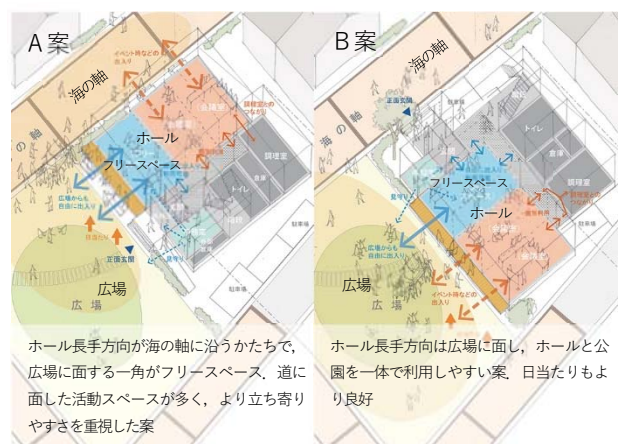


図-5 公民館プラン構成A案とB案

3. 公民館設計の内容

(1) 設計から施工にいたる経緯

前述の協議会内容のまとめは吉里吉里公民館基本構想と位置付けられた。(表-3)その後、2015(平成27)年度7月～11月に基本設計が、2016(平成28)年度10月～3月に実施設計が行われた。設計業務の仕様書には準拠すべき基準となる資料として、大槌町デザインノートが明記された。2017(平成29)年度6月～2月に施工が行われ、2月20日に竣工した。設計から施工にかけての主な関係者を表-4にまとめる。筆者らは設計監理協力として参加した。

表-3 地域復興協議会内容のまとめ

総括 ※以下各部分について	・ホール、フリースペース、縁側と広場が繋がっており公民館と広場を一体的に活用できるようにする。 ・ホールやフリースペースの日当たりを重視したB案をベースにする。
ホール	・移動間仕切りにより、3つに区切ることで2つの会議室とフリースペースとして使用する。 ・イベント時には90畳程度の大きな部屋として一体的に使用する。 ・天井の高さは1階分の高さとし、使い勝手を良くする。
フリースペース	・「安心」をフリースペースのコンセプトにする。 ・事務室に隣接する。 ・開放的で建物内外から見やすいよう工夫を行う。
事務室	・玄関、フリースペース、広場を見守りやすい位置に配置する。 ・居室として十分な日当たりを確保する。
調理室	・住宅のダイニングキッチンのようなコーナーを設けたい一方、幅広く料理教室で使用したい等、様々な意見があるので、検討を進めてゆく。 ・通用口外には、魚のさばきやイベント時の洗いができるよう、屋外の洗い場を設ける。
和室	・畳敷きとし、襖を外せば一体的に利用できるものとする。 ・各室それぞれに押入を設けて、日当たりも十分確保する。
トイレ	・車いす利用、おむつ交換のできる多目的トイレを1箇所設ける。 ・男子の大小便器を各1箇所、女子の便器を2箇所設ける。
倉庫	・内部倉庫に加えて、広場の維持管理道具などを収納する外部倉庫も設ける。
その他	・玄関口の廊下などに、地区の歴史や震災のことを伝えられる展示スペース、展示用の設備を設ける。 ・広場には非常時にも使えるポンプ井戸を設ける。

表-4 設計施工関係者一覧

発注者	大槌町 生涯学習課(関貴紀、小澤美佐夫) 復興推進課(徳田光夫、狩谷淳一)※基本設計 住宅課(小池晋平、西山徹)※実施設計
設計・監理	基本設計 株式会社東京建設コンサルタント(前田格、前田文章) 実施設計・監理 北光コンサル株式会社(伊藤良秀、椎子隼人) 設計監理協力 喜多裕、木内俊克、田中雅之、友寄篤 構造 福山弘構造デザイン(福山弘) 設備 株式会社KJプランニング(高橋将悟、鈴木裕介、手島洋介)※基本設計 設備 株式会社テーテンス事務所(真野智敬)※実施設計・監理 照明・電気 有限会社EOSplus(遠藤和弘、杉山容子) 積算 原建築積算(原弘光)
施工	建築 株式会社八幡建設(倉澤武彦) 電気 株式会社コアテック(阿部祐樹) 機械 株式会社コアテック(佐々木亨)

(2) 吉里吉里公民館の全体構成と仕様

建物全体の構成を次頁の図-6に示す。一階は長手方向で南面して公園と接するホールを平屋部分として配置、ホールの北側には中廊下を挟んでその他諸室を配置、諸室上の二階部分には、暗くなりがちで一階廊下にも明る

さをもたらす工夫を施した。屋根形状は二階部分を切妻とし、同勾配で平屋部分の屋根が公園の方向へ下がっていく、公園に対して長い軒を作るかたちとした。

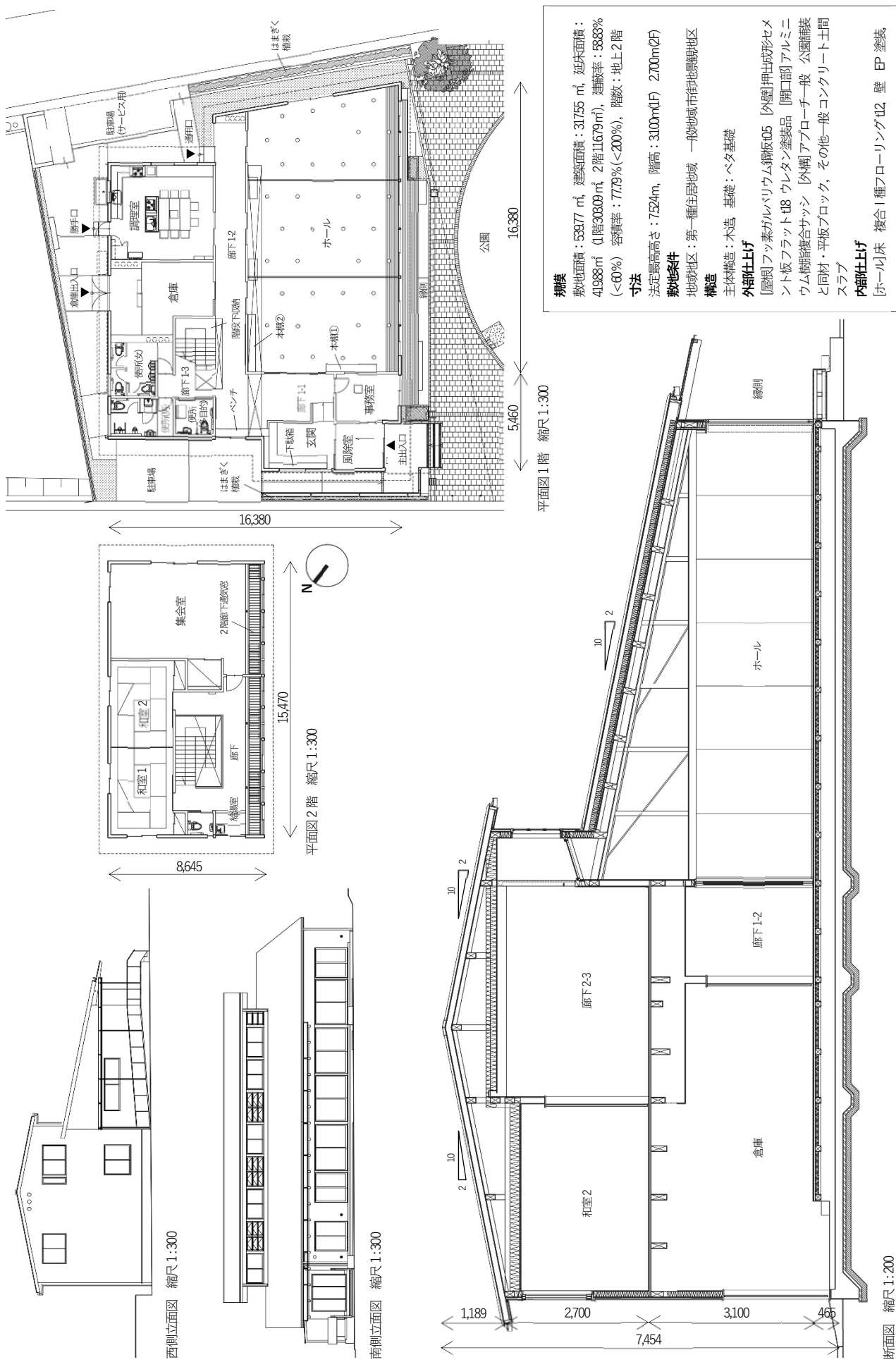
平面計画における特別な点として、協議会で要望のあった「見守り」についての対応がある。ホール一角のフリースペースや公園で想定される子供から老人までの様々な人の活動に、管理者の目が届く環境を整えてほしいとのことであった。玄関・事務室のセットを公園に面した軒の一角に並べ、かつホールに隣接させて見守り環境を確保し、外から事務室へ立ち寄りたりもしやすいようにした。公民館長のところへ集まる人の輪を想定してのプランニングである。

(3) 構え・配置

復興計画にて位置づけられた中心施設として、公民館の配置計画を進める中での第一の課題は公園との一体利用についてであった。ここでの一体利用とは、ホールで活動が行われる際に公園から直接出入りができたり、また公園での活動においてはホールや軒先のスペースが腰掛ける場所になったりと、活動をより豊かに補完しあう状態のことである。そのためには公園と公民館敷地の間に物理的な障壁を設けないことが好ましいが、管轄の違う施設の間でそれを実現するには計画上の調整を要した。

まず敷地間のレベル調整について、基本設計開始時点の造成図の敷地条件から改善を要した点が2点あった。一つ目は一体利用のための公園敷地との段差解消、二つ目は施設の主要なアクセスをよりスムーズにするための海の軸との段差解消であった。学識コーディネーターである二井と共に造成担当の都市整備課や造成設計施工担当の復興CMRと協議を行った。公民館設計側からは、公民館敷地を公園のレベルと緩勾配に合わせてレベル設定することが望ましかった。そこで造成段階での公民館敷地のレベル減調整を望み議論をしたが、造成施工の問題から要求は受け入れられなかった。従って建築工事内においてレベル調整の掘削工事・擁壁工事を行うこととした。手順としては盛り土の再掘削という二度手間になる為、避けたかったことではある。しかし一方で、この協議の過程で、公民館と公園の一体利用についての理解は関係各課により広まり、後の調整のためには良かった。

建物の向きは、海の軸と平行な向きに設定した。玄関や縁側が海の軸に近づき、より立ち寄りやすい印象が整った。またこの向きと敷地形状の関係から、公民館建物と公園の間のアプローチスペースや調理室裏の屋外スペースが副産物的に生まれた。このアプローチスペースは公民館側の敷地であるが、今回の計画では公園の延長としても一体利用したい部分である。公民館の玄関を出たらそこがすぐ公園であると感じられる状態が、全体計画



図一6 吉里吉里公民館 平立断面図

の趣旨としてもふさわしい。そのため公園の雨水処理の側溝を法定敷地境界沿いではなく、公民館敷地側に引き込み、建物との位置関係上違和感の少ない配置を提案し、公園管理の関係各課の了解を得た。舗装仕上げも公園と公民館敷地間で同一かつ境界なしのペーブメント敷きとした。これは工事上也管理上也管轄をまたぐものであり、実施に関わる関係各課と施工者の連携と協力が必須であった。こうして公民館の主要な顔となる条件が公園に面して整い、一体利用の下地ができたといえる(図-7)。



図-7 公民館と公園の境界部。

(4) ホールまわりの構成

公民館全体の断面構成と主要な構造形式を決定する上での課題は、ホールと公園の一体利用をより円滑にする為、公園側の軒部分に広い開口(図-8)を確保することであった。加えて、ホール周りには協議会で要望が多く、前述の見守り環境を確保するためのプランニングをはじめ、フリースペースの設置、ホールを分割利用できることが求められた。また、旧公民館と同様に地区をあげた結婚式などの行事利用も期待された。これら要望の背景には、吉里吉里地区の多様な活動団体の存在がある。彼らが場所を分け合い触れ合う、柔軟な利用のベースになるホールの在り方を検討した。



図-8 公園に面した広い間口を室外・室内から望む。

ホールは3分割で利用できるよう、移動間仕切りを2箇所設けることとした。ホール構造全容は8mスパンのトラス梁2本を間仕切りと同位置に架けた無柱空間である。地震力は屋根面で水平伝達し廊下側の壁面に対応、公園側に広い開口部を設けた。トラスに直交した5.4mの化粧母屋材がホール空間を印象付けている。空間の特色として、用の足りる大きさだけでなく、質の高い居心地で人が集まってくる室を目指した(図-9)。



図-9 ホール内観写真。フリースペース越しに公園を望む。

トラス梁は木と鉄のハイブリッド構造である。圧縮力のかかる上弦材と束材を木材で、引張力のかかる下弦材と斜材を見え掛かりの細い鉄材で担当し、全体に見通しの良い構造とした。軒付近では母屋材から軒桁へかかる屋内の小梁が、外部に延長して出の大きい庇梁を兼ねている。これが公園に面した窓先の場所を特徴づけている。

構造における木材構成としては、トラス上弦材は遠野産のカラマツ集成材、化粧母屋材は陸前高田産の見事な無垢スギ材、全体の柱・梁材は大槌町産材の集成材とし、適材適所で県内の各産地の協力を得た。

環境面の仕組としては、ホールの廊下側上部に通風と明り取りを兼ねた窓を設けた。2階廊下につながり、手動で開閉調整できる。中間期など網戸での通風で十分な日が一日でも増えると良いし、外の天気や気温に目を向けてもらい、公園との一体利用が促進されることも期待した。空調は床吹き出しによる居住域空調で広い室を効率良く調整し、特に冬期の床付近の暖かさを重視した。

上記明り取りにより、日中は中廊下付近のホール空間も自然光の下で過ごせる場所になっている。また照明は主照明を間接光とし、全体に分布する照度を確保したうえで、部分的にスポットライトを設けて活動に合わせた明るさで場所づくりができるようにしている。

吉里吉里地区では多世代・多数の団体がそれぞれの活動の様子を日頃から目にして、必要とあらばサポートし合える関係性が見える。利用状況に応じた場所のやりくりへの対応は、そうした人模様をなぞることであった。それぞれの地域活動において、公民館が道具のようなイメージで活発に利用してもらえる構成を目指した。

(5) スペースの連携

ホールなどで活動があれば、周りの廊下などでも利用者達の出会いや会話が生まれうる。そうした場で起こる井戸端会議も貴重なコミュニケーションである。あいさつ程度でも家族や友人関係のまわりにある「地域」との関わりを意識する重要なきっかけといえる。だからこそ共用部で過ごす時間や、館内の活動を意識できるスペー

スの連携が施設の価値となると考え、構成や仕上げによる工夫を加えた。

ホールの公園に面した開口部周辺は、公園とホール内の活動の間で、半屋外的な使い方も想定される。底下にはヒノキ材の幅広い縁側を設け、また室内側の床面は窓際の仕上げ材を切り替えて無垢のヒノキ材とし、縁側との視覚や質感のつながりを強調した。窓を開ければ内も外も一つの場所だと感じてもらえることを目指した。

ホールの廊下側上部の通風兼明り取り窓は、1階と2階を空間的にも環境的にもつなげている。階段の吹抜けは一回り大きくし、ささら・手摺の間を光や視線が抜けやすくした。階段室の壁面は2階に向かって明るさが広がる印象が強まるよう、木目を残した淡く明るい水色に彩色した。またその印象が廊下全体につながっていくよう、同じ彩色を廊下の天井にも施した。1階部分でも明るく、上下階のつながりを感じられる構成を意図した(図-10)。



図-10 階段室の吹抜けと廊下 図-11 玄関周りの家具など

また、活動の手がかりとなる木製の仕上げや家具を、人の活動が想定される箇所に配置した。造り付けのベンチ、書棚、カウンター、掲示板等をホール内のフリースペースや人がよく通る共用の動線上に配置した(図-11)。なお、こうした仕上げ・しつらえの工夫のベースになるのは、諸室の連携を見越した開口の配置である。用途上の利便性向上のため、視線や風が室から室、室内から外へ抜けるため、通りの良いプランニングとした。

外部仕上げとしては、地域の自然の特徴である時刻や天候の変化を映し込みやすい薄い無彩色の色調とした。海が近く、時に激しい風雪もあり、耐候性のグレードは上げた。公民館での活動がまちから見た風景の中で第一に目立つよう、活動と木素材を関連づけた考え方を外部にも拡張し、軒先や縁側で木の素材感により活動を彩った。設備類を集約した北側外壁周りでも、過ごしたいと感じる居場所になるよう、人の出入口周りの外壁仕上げにボーダーパターンの切り替えを施し、側にはベンチを設置した。他、外構では地域で奨励しているはまぎくの植え込み、境界ブロックのレンガによる高質化を行った。

これらは共用部や館内の各所で他の活動やスペースを意識するきっかけであり、一つ一つではささやかなコミュニケーションを生む仕掛けであるがその積み重ねの先で、来館者が地域に関わっている実感や、能動的に地域に関わりたいという気分が育まれることを期待している。

(6)各室のしつらえ

各室のしつらえについては、協議会で掲げられた「いつでもだれでも自由に使える」感覚を育む仕掛けとして、公共施設としての格式を保ちながら、家庭的なあたたかさや親密さを両立することを目的に設定した。

たとえばホール内のフリースペースにおいては、普段から地域の子どもが入りやすいよう、床に自由に座ることを促すラグや、低い子ども用の家具を配置した(図-12)。集会室、和室、湯沸かし室は、一体で2階の明るさを享受できる開放的な構成となっており、特に湯沸かし室と和室は広々とした階段室を共有する形で隣接させた。和室や集会室からお茶を入れに行く行為自体を楽しむような使い方が期待されている。トイレも居心地に配慮し、パーティション内部は木調で仕上げられ、男女トイレ入口には廊下のフローリング床を引き込んだ。



図-12 フリースペース利用状況 公共性と親密さの両立。

また協議会にて、雰囲気を家庭的にという要望と料理教室も可能な構成をという要望と、バリエーションが求められていた調理室では、アイランド構成のキッチンと、柔軟にレイアウトが可能な家具で室を構成した(図-13)。カウンターはイベント時も大勢利用できる長さを確保の上、ホールや外部流しと連携しやすいプランニングとした。屋外シンク周りも庇やベンチを設置するなど快適性に注意を払った。素材には温かみを感じられて掃除もしやすい、家庭的な仕様バランスの木調を全面に採用した。

これらの効果は個々の要素ではほとんど意識されないようなものばかりかもしれないが、施設全体の方針を示しつつ、各室におけるしつらえとして馴染み、活動の自由を妨げないバランスを実現できたと考えている。



図-13 木調にしつらえられた調理室。

4. 本計画の考察

今回の吉里吉里地区の場合を含め、災害復興の計画では、従前から継承すべきことにせよ変革すべきことにせよ、計画で捉えるべき課題が地域それぞれのかたちで求

められる、という点が特徴だと言える。従って計画の検討は、それをなるべく一般化せず、その地域の特定の価値観を計画内に獲得する過程と考えて公民館計画を進めてきた。建築は土木や都市の計画と、地域の価値観を共有することではじめて地域の中で積極的に利用され、能動的に管理されるものとなる。そのために今回の計画の中で有効であった点について以下に記述したい。

(1) 設計までの計画・体制に関して

まず並行して進む事業との連携の効果について述べたい。計画段階では前述のように地区ごとに専門家のチームが編成され、住民による検討や協議がチーム同席のもと行われた。その後、各事業が進むにあたって、必要に応じて事業間での設計内容の相互調整が行われた。その際、調整の内容や方向性が全体計画に即しているかどうかについては、協議チームで確認を得て進めることが望ましい。しかし実際には年度毎の事業体制上、専門家がオフィシャルに位置づけられないこともあった。そのため大槌町においてはデザインノートという、イメージ図と協議記録などが一体となった資料を地区ごとに作成し、各計画の基本構想として位置づけて、事業連携や地区住民との情報共有の手段の一つとしていた。これにより事業間の調整などにおいても計画上何を特に優先すべきなのか、周知理解が進んでいた。前述したような公民館敷地と公園敷地の間での利用状況の調整の議論などにおいては、ノート内の記録について明言があったわけではないが、前提となる考え方が周知されている状況から作業に入ることができたため、課題整理や目標の共有がスムーズであった。建築設計側からの基盤整備側への要請も、全体の意図を汲みつつおこなうことが可能になったと考えている。成果としての建築も、まち全体の骨格に込められた意図を反映したものになったと言える。

また、その過程の中で、役場関係各課や複数事業主体間でも情報共有の場になっていた住民との協議会の意義は大きい。地区住民にとっては吉里吉里地区のあり方を考えて表明する場が色々なスケールのテーマで与えられている状況であった。時間のない中でも将来に向けた価値観の変化には危機感を持ち、主体的にまちを作り上げていかなければいけないというのは、大槌町や地区住民の取り組みから教わったことである。

住民参加を行うだけで必ずしも地域の価値観を獲得できるわけではないことは、筆者も含め多くの計画者が感じているところかと思われる。地域を成立させる基盤整備からの計画的積み上げ・調整、及びその各段階においての地域による価値判断と建物の設計とがダイナミックに進展を共にしたことが、今回の設計において不可欠であった。

(2) 設計上の考え方として

今回の公民館の設計では、地域の価値観を獲得し、それにより活動の自発性が育まれることをデザインで後押しできるかどうかに取り組んだ。微細な設えの在り方でも変化しうる活動心理への働きかけであり、それを建築設計においての要点の一つとして考えた。

上述してきたように、今回の計画は多層的なスケールに渡ってそうした働きかけを行い、連鎖的な効果を以て地域の新しい構造とつながることに最も留意して計画した。西村が提唱している「シビルパブリック」⁷⁾の概念で述べられているように、まちへの関わりにおいて能動性の生まれる空間こそ、公共計画の目指すべきところであると我々も考えている。公共施設の設計判断の評価軸の一つとして、また竣工後の公共施設やそれを取り囲む地域社会の成熟度を測る基準として、能動性の育成に着眼した研究の蓄積が今後進んでいくことを期待したい。

平成30年2月に公民館は竣工し、4月には盛況な落成式が行われた。その様子は吉里吉里地区の地域力を物語るものであった。これからも地域活動の風景が公民館やその周りで生まれて地域の思い出となってほしいと思う。また、今回の報告と考察が世界各地の災害復興計画に取り組む地域や、各地のまちづくりにかかる建築計画にも参考となれば何よりである。

謝辞：本計画および建築は、地区住民、町役場、学識者、コンサルタント、設計協力者、また施工を手掛けた八幡建設はじめ関係各位の尽力によるものである。あらためて謝意を示すとともに、吉里吉里地区の復興を願う。本稿の記述は一担当者の視点からまとめたものであり、その一切の責任は筆者に帰するものである。

参考文献

- 1) 大槌町：大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画，2011
- 2) 中井 祐：大槌町の復興における各地区空間計画-大槌デザイン会議の試み-，土木学会景観デザイン研究講演集，No. 10，pp. 290-292，2014
- 3) 二井 明佳：岩手県上閉伊郡大槌町 吉里吉里地区における復興まちづくりについて，土木学会景観デザイン研究講演集，No. 11，pp. 131-138，2015
- 4) 中井 祐：岩手県上閉伊郡大槌町の復興計画について，土木学会景観デザイン研究講演集，No. 8，pp. 249-252，2012
- 5) 大槌町：大槌町防災マップ 地図10，2017
- 6) 前掲 2)
- 7) 西村 亮彦：Humanscapeから読み解く都市空間の公共性 メキシコシティ旧市街フアン・ホセ・バス広場を例に，土木学会景観デザイン研究講演集，No. 11，pp. 167-176，2015